突然の事故で意識不明があった、
クモ膜下出血や脳梗塞などの病気や手術の後、
こんなことでお悩みではありませんか？

高次脳機能障害と診断された

人との関係がうまくいかなくなった

将来のことが心配

思うように仕事や勉強ができなくなった

イライラしたり不安な気持ちになりやすい

もしかしたら
高次脳機能障害？

まずご連絡ください

社会復帰、社会参加などで困っている高次脳機能障害をお持ちのかたの、ご相談をお受けしています

＜相談先＞

高次脳機能障害相談支援センター
TEL（0532）39-3011　豊橋市栄町 147-1

高次脳機能障害相談支援センター笑い太鼓名古屋
TEL（052）805-8745　名古屋市東区東大曽根町 25-2

高次脳機能障害とは…

事故（交通事故や転落など）や病気（クモ膜下出血、脳内出血、脳梗塞、脳炎など）で脳に損傷を受けて生じる、次のような後遺症のことを指します。

- 記憶障害　すぐに忘れるようになった。何度も同じことを聞く
- 注意障害　ミスが多くなった、同時に注意が払えなくなった
- 遂行機能障害　物事を関連付けて考えることが苦手になった、段取りが悪くなった
- 社会的行動障害　すぐにイライラするようになった、抑制が効かなくなった、子供っぽくなった

NPO法人高次脳機能障害者支援「笑い太鼓」
（愛知県高次脳機能障害者社会復帰促進事業実施機関）

豊橋市

■**笑い太鼓法人本部**
〒440-0047 豊橋市東田仲の町57番地
TEL／FAX 0532-66-3330

■**高次脳機能障害者支援センター**
〒440-0047 豊橋市東田仲の町57番地
TEL 0532-63-6644　FAX 0532-66-3330

■**高次脳機能障害相談支援センター**
〒440-0042 豊橋市栄町147-1
TEL 0532-39-3011　FAX 0532-39-3008

名古屋市

■**高次脳機能障害者サポートセンター笑い太鼓**
〒461-0022 名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL／FAX 052-981-3033

■**高次脳機能障害相談支援センター笑い太鼓名古屋**
〒461-0022 名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL 052-508-8745　FAX 052-981-3033

■**高次脳機能障害者ケアサポート笑い太鼓**
〒461-0022 名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL 052-508-8750　FAX 052-981-3033

岡崎市

■**高次脳機能障害者支援センター笑い太鼓岡崎**
〒444-0871 岡崎市大西3丁目9-3
TEL／FAX 0564-77-3307

地域活動支援事業　　名古屋市

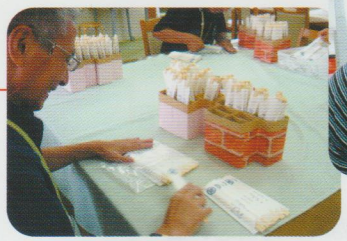
高次脳機能障害者サポートセンター笑い太鼓

ゴールよりプロセスを大事にしたサポートをモットーに高次脳機能障害者を支えます！

サポートセンター笑い太鼓は高次脳機能障害の方を対象とした名古屋市地域活動支援事業の一環として、日中支援を主とするデイサービスです。
様々な活動や作業を通して、高次脳機能障害者の方の持続性や発動性、コミュニケーション力の向上に繋げたいと考えています。
高次脳機能障害によって断ち切れてしまった各々の人生のひとコマを、皆さんと一緒に結び直していけたらと考えています。
開放的で明るい雰囲気、誰もが気持ちよく利用できる環境作りに努めていますので、どうぞ一度お立ち寄りください。
共に力を合わせ、共感の輪を広げていけたらと考えています。

ワーク

箸入れ、短冊づくりなど、その他広告会社に依頼された様々な軽作業に取り組み、脳を使うことを習慣づけてい ます。

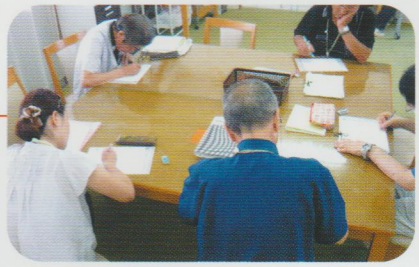


EQを高める

歌とピアノ、絵手紙、習字、健康体操、コーラス鑑賞など、楽しみながら人との交わりを大切に趣のある創作活動を しています。

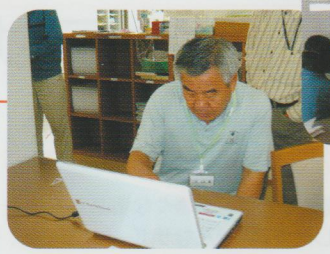
IQを高める

ドリルは頭の体操、メモリーノートは自分の行動の位置づけとして。
脳を使う習慣を目的にしています。



OT（作業療法）

料理・パソコン・防災など、
生活への支援に取り組んでいます。



施設自慢の手作り昼食

＜ある日のメニュー＞
・肉じゃが・白和え味噌汁・ごはん・香の物。
栄養バランスに配慮、出来たてを戴きます。

お申込みの方法

ご利用できる方	主に高次脳機能障害を有する方であり、高次脳機能障害者の診断書、または障害者手帳をお持ちの方で障害福祉サービスの受給者証をお持ちの方

ご利用までの流れ

相　談	悩んでいないで まずご相談ください。
▼	
体　験	場合によって 体験利用も可能です。
▼	
申込み	ご利用いただくには いくつかの条件があります。 市町村への申込みが必要です。
▼	
契　約	
▼	
ご利用開始	

■高次脳機能障害者
サポートセンター笑い太鼓

利用日：月～金曜日
午前10時～午後4時15分
年末年始の休業日：12/30～1/4

〒461-0022
名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL／FAX　052-981-3033

指定一般相談事業　指定特定相談事業　　名古屋市

高次脳機能障害相談支援センター笑い太鼓名古屋

高次脳機能障害者でお悩みの方、ご家族の方、ともに考えていきましょう！

高次脳機能障害の方を対象にした指定相談支援事業です。高次脳機能障害のため、今後の生活についてお悩みの方、行き場がなくて困っていらっしゃる方、仲間との交流や情報交換をしたい方など、日々の暮らしの中で抱えていらっしゃる課題を把握、きめ細かい対応を心がけています。また必要に応じて適切な障害保健福祉サービスに結びつけていく事業です。
高次脳機能障害者の方のみならず、ご家族を含めた相談支援に取り組んでいます。
一人でも多くの方のご相談に応じていきたいと考えています。

ご相談事例

- 脳血管障害が原因で、高次脳機能障害に家族がなってしまい途方に暮れていましたが、同じような境遇の皆さんがいることを知り、勇気が出ました。
- 高次脳機能障害に関する具体的な情報がほとんどなく、毎日思い悩むことばかりでしたが、思いきってご相談して救われました。
- 自分で判断できないことも親切に傍でサポートしてくださいました。たいへん心強かったです。
- 高次脳機能障害の相談にのってくださるので、説明しづらい部分が楽に話せました。

- 下記の時間内にお電話でご予約のうえ、お越しいただくとスムーズにご相談に応じることができます。

■高次脳機能障害相談支援センター
笑い太鼓名古屋

相談日：月～金曜日
相談時間：午前9時～午後5時

〒461-0022
名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL 052-508-8745
FAX 052-981-3033

移動支援事業・居宅介護事業　　名古屋市

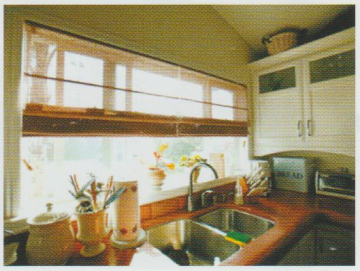
高次脳機能障害者ケアサポート笑い太鼓

生活の細かなひとコマ、ひとコマでの暮らしやすさをサポートします。

高次脳機能障害者ケアサポート笑い太鼓は、高次脳機能障害者の様々な場面でのサポートをします。
日常生活の中でのちょっとした後押し、またちょっとした介助、そんなサポートを基本に、その人その人の今出来る事を生かし、無理なく安心して一緒に行うことを大切に、生活の細かなひとコマ、ひとコマでの暮らしやすさをサポートします。
日中の居場所である「サポートセンター笑い太鼓」、悩みや困りごとを一緒に考える「相談支援センター笑い太鼓名古屋」の2つの事業所とも連携して、総合的に高次脳機能障害者の生活支援をしていきます。

具体的な支援事例

- 食事介助●入浴介助●清拭介助●清潔介助
- 更衣介助●体位介助●移動移乗介助
- 起床介助●就寝介助●服薬介助
- デイ送迎介助●環境整備●調理配膳介助
- 洗濯●衣類整理●掃除●ゴミ出し
- ベットメイク●薬の受取診察券入れ
- 買い物●自立支援見守り援助など、生活の場面で必要な介助



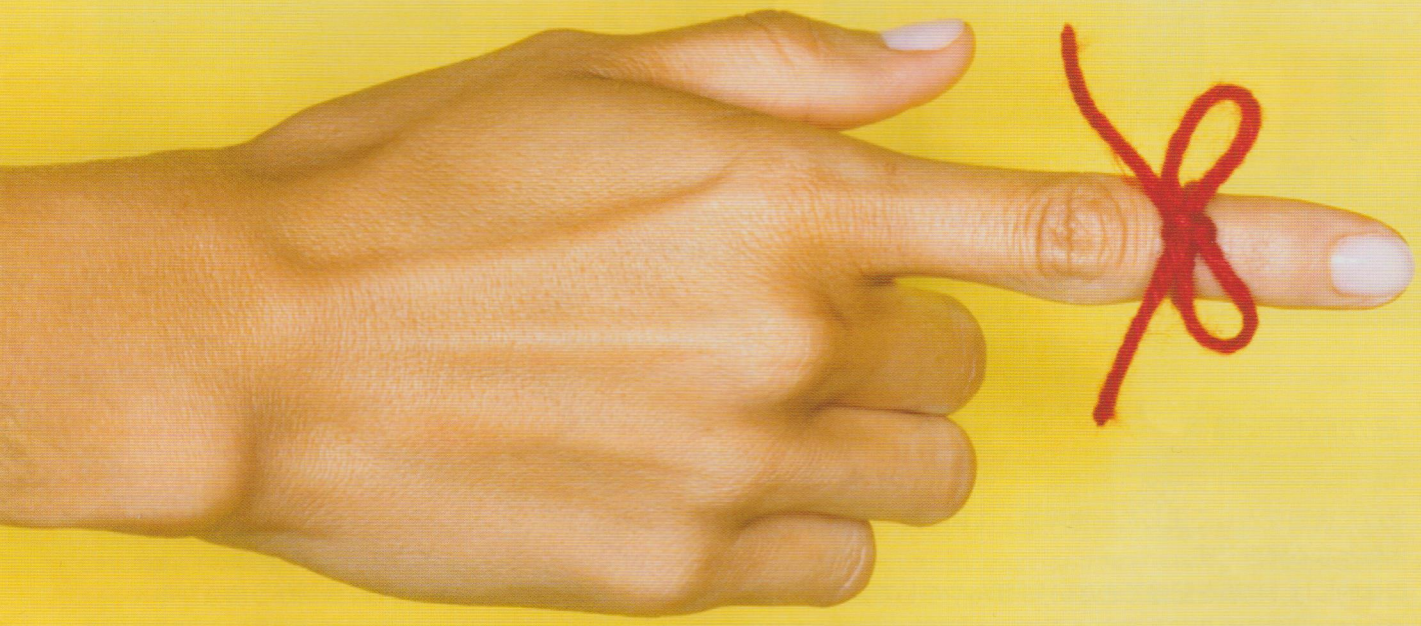
■高次脳機能障害者
ケアサポート笑い太鼓

利用日：月～金曜日
午前10時～午後4時15分
年末年始の休業日：12/30～1/4

〒461-0022
名古屋市東区東大曽根町25-2
TEL 052-508-8750
FAX 052-981-3033

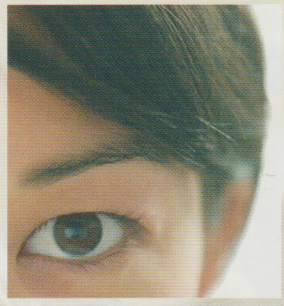
悩んでいないで相談してみませんか？

笑い太鼓は高次脳機能障害に悩む方々の
社会参加を支援します。



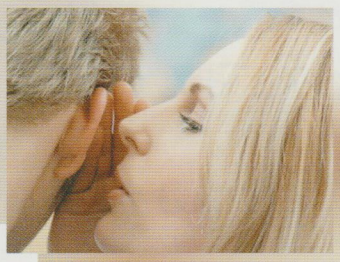
特定非営利活動法人
高次脳機能障害者支援「笑い太鼓」

SINCE 1998

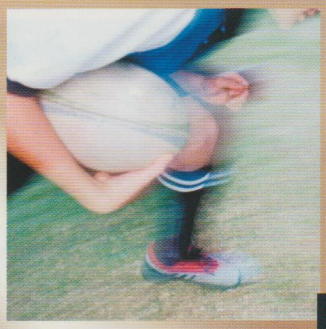


見ること

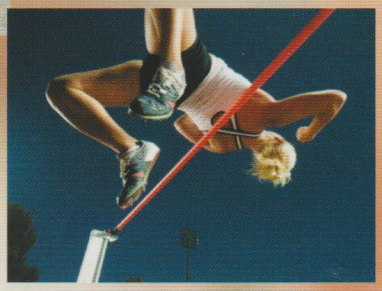
聞くこと



話すこと



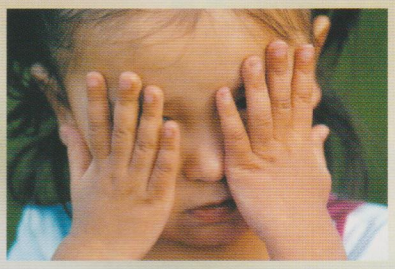
走ること



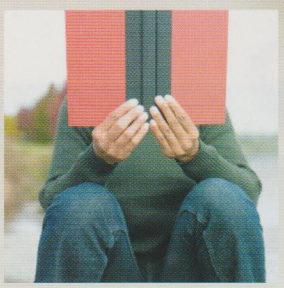
跳ぶこと

笑うこと

歌うこと



泣くこと



学ぶこと

働くこと

創ること

生きていくこと

高次脳機能障害

「高次脳機能障害」は病気（脳梗塞、くも膜下出血、脳炎など）や事故（交通事故や転落、水難事故など）で脳に損傷を受けた後遺症として生じた記憶障害・注意障害・社会的行動障害などの要因から、日常生活及び社会生活への適応が困難となる障害です。

具体的には「物事を記憶できない」「ぼんやりして注意がうまく払えない」「感情的になりやすい」「会話がうまくかみ合わない」「段取り良く作業をすることや、順序だてて物事を行うことができない」等の症状が有ります。

これらは日常生活において大きな支障をもたらす場合がありますが、外見からはその障害が分かりにくく、十分な理解や対応が得られないのが現状です。高次脳機能障害者は全国で30万人とも50万人ともいわれています。

病気や事故の後、以前と変わったと感じたら、少しでも早く、病院、専門機関へご相談ください。

活動の目的

- 高次脳機能障害の研修・啓発活動
- 高次脳機能障害者の自立支援、就労支援
- 高次脳機能障害当事者、家族に対する相談支援

「笑い太鼓」は、高次脳機能障害者の地域生活、一般就労といった社会参加、また日常生活を営む上での様々な問題をともに考え、主体性を持って対処できるようになることと、高次脳機能障害に対する地域の理解を広めることを目的として活動しています。

「笑い太鼓」のどの施設も高次脳機能障害者を「社会生活能力を再獲得する人たち」と位置付け、仕事や日常活動における体験の中で障害の認識を促進し、日常の様々な問題への対処が出来るようになり、徐々に社会生活が可能になっていくと考えています。

笑い太鼓の由来

たとえ障害を負っても笑って障害を吹き飛ばし、
太鼓の響きのように力強く
前向きに生きていこうと、
2001年に小規模授産施設を開設した時、
施設の名前を「工房笑い太鼓」としたことが
笑い太鼓という名前の始まりです。

病気や事故の後、以前と変わったことはありませんか？

高次脳機能障害理解のために

国立障害者リハビリテーションセンター学院長
中島　八十一

<プロフィール>

1976年	順天堂大学医学部卒業
1985-86年	ベルギー王国ブリュッセル自由大学脳研究部門出向
1987年	順天堂大学医学部神経学講座講師
1994年	国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所室長
1997年	国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所部長
1998年	東京大学大学院教育学研究科教授（併任）
2006年	国立身体障害者リハビリテーションセンター学院長
2008年	国立障害者リハビリテーションセンター学院長

※　愛知県豊橋市出身
※　2010年笑い太鼓と愛知県豊橋市共催の講演会「高次脳機能障害支援セミナー」講師として協力

1. 高次脳機能障害とは何か

高次脳機能障害は難しい言葉であり、身近な人が高次脳機能障害になったというような経験がなければ、とてもこの言葉をじっと見つめるだけでは実像をイメージできません。どうかすると高次脳機能障害について互いに話していることの内容が違ったものになってしまうかもしれません。高次脳機能障害とは何かという見出しは、医学的にどういうことかということと、障害者として支援サービスを利用するときにどういう立場になるかというようなことをひっくるめて付けてあります。

人間の脳は場所によって違う働きをもっています。手を動かすときには手の筋肉を動かす場所と、何のために手を動かすかを考える場所が別々にあります。案内板を見て、目に見えた文字や図柄を理解する場所とそれに従って行動するかどうか判断するところは別のものになります。そのような手を動かす目的を決めたり、案内板を見てどちらに行くか判断するような脳の働きを高次脳機能といい、その障害を高次脳機能障害といいます。医学的には失語や失認と呼ばれる障害も含まれます。

一方、頭のケガや脳血管障害などが理由で高次脳機能障害になった人たちにはある程度共通した特徴があって、似たような支援サービスがあったら社会復帰に役立つということが知られるようになりました。そこでその共通した特徴をもつ人々が障害者として認定され、医療・福祉サービスが受けられるようにするために高次脳機能障害とは何かということを決めました。これが行政的な高次脳機能障害診断基準というものです。
日本の社会では障害者手帳に代表されるように、障害者として認定を受けなければどのような障害であっても医療・福祉サービスの利用は通常できません。まずこの診断基準に合っているかどうか医療機関で診断してもらい、役所でサービス利用のための手続きをとる必要があります。

頭のケガや脳血管障害などで治療を受け、見た目で良くなったにもかかわらず、何だか日々の暮らし方が変わってしまったと思えば高次脳機能障害である可能性があります。そんなときには、各都道府県に高次脳機能障害支援拠点機関があるので、訪ねれば高次脳機能障害であるかどうかも含めて相談に乗ってくれるはずです。

2. 高次脳機能障害の発生原因

高次脳機能障害の発生原因としては脳血管障害（脳梗塞、脳出血、くも膜下出血など）が最も多く、次いで頭のケガが多く、他に窒息、脳炎や脳腫瘍の手術後が原因となります。しかし、50歳以下の年齢層では頭のケガによる外傷性脳損傷が最も多い原因となります。

もう少し詳しく説明してみましょう。脳血管障害では脳の血管が破裂して脳出血を生じる場合と血管が詰まって脳梗塞になる場合とがありますが、20代や30代といった比較的若い年齢層ではくも膜下出血が原因となる例が多いと考えられています。くも膜下出血は、さらにその原因がもやもや病であったり、脳動静脈奇形（AVM）であったりで、脳動脈瘤ばかりではありません。特に前頭葉と呼ばれる脳の前の部分が損傷されると、顕著な高次脳機能障害としての特徴を出してきます。

外傷性脳損傷（脳外傷）はいうまでもなく頭をぶつけたときに生じる脳の損傷のことで、交通事故ばかりでなく、高いところから転落することでも生じます。交通事故も自動車事故ばかりではなく、自転車で深い溝に落ちたことによる例も少なくありません。一般的には、頭を打って意識不明の状態が続くような強い打撲の後遺症として高次脳機能障害が発現します。

窒息は水におぼれることを思い浮かべる方が多いと思いますが、そればかりではありません。機械や重いものに挟まれたりすることや、心筋梗塞などの病気や首の骨を折ったりして一時的に自分では呼吸できない状態が続いたりすることで、高次脳機能障害が残ることもあります。

多くはありませんが脳炎も原因として挙げられます。また脳腫瘍で手術した結果として高次脳機能障害が見られる方もいらっしゃいます。

原因が何であっても、人生の途中で脳に傷がついたことにより高次脳機能障害が発現するような例を、行政的には高次脳機能障害として認定しています。他方、医学的には高次脳機能障害が見られるのだけれども病気の性質により高次脳機能障害の枠組みに入れていない病気もありますので、詳しくは支援拠点機関にお尋ねください。

3. 障害の特徴

診断基準には記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害とあり、そのいずれかによって日常生活や社会生活に困難を生じていることが認定の要件です。
この中で記憶障害は最も分かりやすい症状で、物の置き場所を忘れたり、新しいできごとを覚えていられなくなることです。そのために何度も同じことを繰り返し質問したりすることもあります。

注意障害は難しい用語ですが、注意集中が足りないとか、不注意で失敗したというような日常的な表現とおおまかには一致します。その結果ぼんやりしているような印象をもたれ、実際に何かしようとするとミスばかりします。作業が長続きせず、すぐに疲れてしまうのも特徴的です。細かく観察するとふたつの事を同時にしようとすると混乱してしまい、できなくなるといったこともあります。料理するときには火加減を見ながら、一方で野菜を刻むということをするわけですが、これができません。

遂行機能障害は自分で計画を立ててものごとを実行することができないことです。誰でも朝になれば今日一日の行動計画をおおざっぱでも思い描きますが、それができなくなります。人に指示してもらわないと何をしていいのか分からず、そのままになってしまうか、いきあたりばったりの行動になってしまいます。

社会的行動障害には、対人技能拙劣、依存性・退行、意欲・発動性の低下、固執性、感情コントロール低下といった項目を含みます。対人技能拙劣は他人の立場を考えながら一緒に行動することができないことです。依存性・退行は他人にすべてお任せといった状態になることです。意欲・発動性の低下は何もしたいことがなく、自らは何もしようとしないで引きこもってしまうようなことをいいます。固執性は何かひとつを始めると、そのことにこだわって次のことに移れないことをいいます。感情コントロール低下は少しでも不愉快なことがあると、カッと来たり、時には大暴れするようなことを指します。社会生活を送るためにはいろいろな能力を必要としますが、高次脳機能障害の方はこれがうまくできません。

これ以外に病識欠如という自分が障害をもっていることに対する認識がうまくできず、障害がないかのようにふるまったり、言ったりすることも見られます。

4. 対応について

何よりも大切なことは高次脳機能障害があるということのきちんとした診断と、その障害のためにいろいろなことができないということを家族や周囲の人が認識することです。決してそうしたくて怠け者になっているわけではありません。また、障害の特性を知り、必要な支援をするだけでいろいろなことができるようになることも事実です。

記憶障害や遂行機能障害が目立つ方はメモを取り、それを参照しながら行動することが勧められますが、どうしても自分でできなければ家族や周囲の方が必要なことをメモしてそれを見るようにします。高次脳機能障害の方でもパソコンや携帯電話を使うことが上手な方もいますので、その場合はこれらの機器はとても役立つことがあります。

注意障害の目立つ方は何よりも疲労しやすく、長い時間同じ作業を続けることが難しいので、休憩をこまめに取り、全体としての仕事量も少なくすることが大事です。また、急かしたりすることは禁物で、何事もゆっくり進めることを心がけます。

感情の起伏が激しく、ややもするとケンカになってしまうような方では、なぜそうなったかを周囲の方が記録に残しておく必要があります。何回かすれば、共通してある特定のことがあったときに感情が高ぶることが分かります。そうならないように周囲の方が注意するということで、かなり問題は減ります。中には薬剤が問題行動の解消に役立つこともありますので、どのようにしても難しければ専門医を受診することが必要になります。 職場などの他人と一緒に生活する場面では、できれば専門家が定期的に状況を見て回れるようなところが好ましいのですが、必ずしもそれが可能とは限りません。そこで受け入れ側に高次脳機能障害の特質と対応を良く理解してもらう必要があります。そうして初めて仕事という最終目標が実現できるようになることを忘れてはなりません。

それでも困ることは山ほど出てきます。公的には支援拠点機関を始め、自立支援組織に相談することが可能です。一方、当事者の家族同士の話し合いも極めて重要です。家族会で語り合うことは、なぐさめになることはもちろんですが、それ以上に有益な知識と知恵を得ることに役立つはずです。笑い太鼓のような家族会が自ら居場所を作り上げたように、高次脳機能障害の方にとって住みやすい環境の整備にも家族同士の力は役立つはずです。